南山大学人類学博物館
museum notes
・石匙の観察～線で表現する石器～
・ツルツルツル…/ツルツル…カリッ
―触って調べる縄文の文化
VOL.4 2021.6

石匙の観察
～線で表現する石器～

今回紹介するのは石匙（いしさじ）という石器です（図一）。旧大田町（現在の美濃加茂市）で出土したサヌカイト製の石匙です。この石匙は、加工によってつけられた刃とつまみがあることが特徴です。図二からもそうした形が分かるかと思います。

さて、図二のような黒の線だけで表現された石器の図はあまり見慣れないものではないでしょうか。こうした図を実測図と言い、遺物を記録する方法の一つとして考古学の世界では重宝されてきました。石器の実測図では、石器の形と加工の痕跡などを表現します。図の石匙の刃部の部分にびっしりと線が描かれていますが、これは刃部を作るために細かな加工が施されていることを表しています。一方で裏面には刃部を作るための加工がないことから、刃としての機能を作り出すためには正面だけの加工で十分だったのだろうと考えられます。つまみの部分にも細かい加工が両面に施されていることもわかるかと思います。つまりこの石器の製作者がつまみの形を意識して加工していたのです。黒く塗りつぶされた部分は近年、何らかの影響で欠損してしまった部分を表現しています。このように線だけで石器の持つ情報を表現していくことが可能です。

今回、私もこの石匙の実測図を製作しました（図三）。ただ完成させるまで十時間近くの時間を費やしています。その十時間の工程の中には、遺物の観察から正確に測り下図に落とし込む実測、その図をトレーシングペーパーに墨入れするトレ

図 1:岐阜県旧大田町出土 石匙

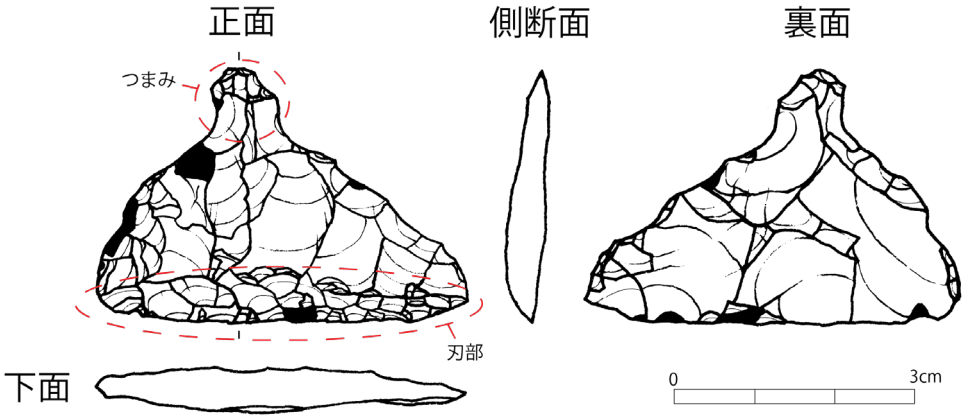

図 2:石匙の実測図

ース、トレース図の修正、展開図のレイアウトなどが含まれます。全く骨の折れる作業です。ですがその時間には大きな意義があるとはっきり言っておきます。実測図はただの平面上に落とし込んだ遺物のスケッチではなくて、実測を行った人による観察結果や解釈が表現されている精密な図なのです。つまり実測図を通して遺物に対する自身の考えを述べることが出来るのです。ここに写真などの技術が普及しても、実測図が描き続けられてきた理由があると言えます。

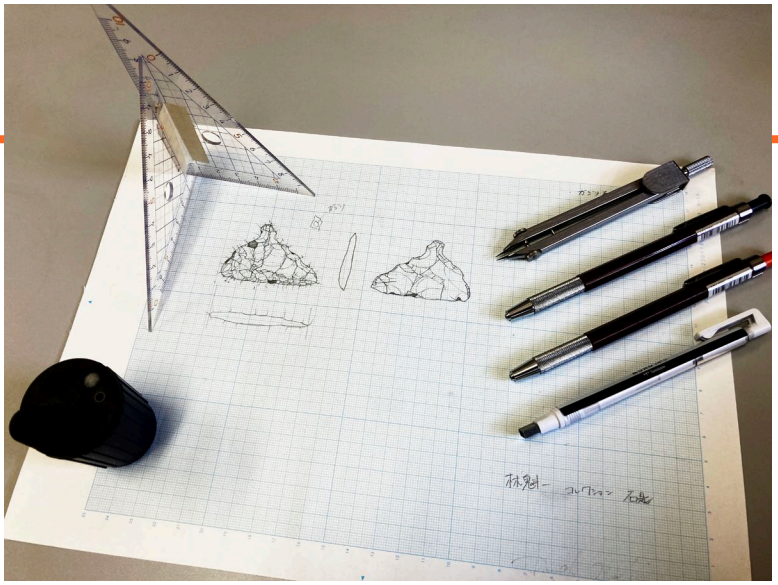

図 3:実測の様子

今日実測の世界にもデジタル技術を活用する例があります。例えばトレースはデジタルツールを使用する例が増えてきました。デジタルな方法では、便利なツールを使いながら描きあげていく一方で、アナログな方法はインクとペンのみで描きあげます。また水彩画と油絵では絵の質感が違うように、デジタルとアナログではそれぞれ違った表現の質感があります。勿論、どちらが良いとは一概に言えません。ただペンを紙面上に滑らせた時に滲むインクの素朴な匂いが私は好きです。

さて、実測に関しての語りはここまでにして今回の主役である石匙に話を戻しましょう。石匙の特徴は何といってもこのつまみの部分です。そんな特徴的なかたちをした石匙は、江戸時代の頃から「天狗の飯匕」（てんぐのめしがい）と呼ばれ注目されてきた石器でもあります。その特異な形に江戸時代の石マニアも惹かれていたのです。

では、このつまみはなんのために作られたのでしょうか。現在のところ、ここには紐が付けられていたと考えられています。実際に宮城県の山王遺跡からは紐のついた石匙が発見されています。つまり携帯を想定していた石器であることを示しているのです。

さて、石匙は万能道具と言われています。なんだか的を射ているように聞こえますが、裏を返せばよくわかっていないのが現状です。もちろん刃に残る痕跡からその使い方を考えようとする研究もあります。ですがその研究でも様々な用途に使用されているという結果が示されています。たとえば皮をなめしたり、物を切るといった使いかたが想定されている訳です。確かにつまみが付いていれば持ち運びも楽ですし、携帯用なのでいざと言った際にも使えるでしょう。万能道具というのはある意味、適切な表現なのかもしれません。

携帯用と言うことは持ち主の個性を表現することもできたのでしょう。カッコつけて高級車のキーをクルクルと指で回すように、縄文人も自身の個性をアピールするために、紐についた石匙をクルクルと回していたのかもしれません。私も回してみたいものです。

（南山大学大学院人間文化研究科
人類学専攻博士前期課程　加藤　大智）

ツルツルツル…/ツルツル…カリッ
―触って調べる縄文の文化

「石冠(せっかん)」という名前に聞き覚えはありますか？あったらかなり縄文通だと思います。石冠というのは縄文時代中期から晩期(紀元前五五〇〇年～四〇〇年)にかけて石で作られた祈りの道具で、東北地方、北陸地方、中部高地そして愛知県によく見られます。祈りの道具と言われる点では石棒と似たようなものだと思ってもらっても構いません。ただ、どのような祈りに使われたのかはわかっていないのが現状です。わたしたちは道具をじっくりと観察することで縄文人が何を祈っていたのか、どのように祈っていたのかを明らかにしようと研究を重ねています。

さて、南山大学が収蔵している石冠は愛知県田原市にある保美貝塚から出土したもの(図四)と、東北地方で収集されたものです。今回は保美貝塚から出土した資料の方を観察していきましょう。

図４:愛知県田原市 保美貝塚出土 石冠

保美貝塚の石冠は黒色で緻密な岩石を用いて作られています。おそらく泥質岩でしょう。半分ほど欠けているので全体の形が想像しにくいかもしれませんが、正面から見ると丸みを帯びた四角形の裾が広がったような形で、横から見ると三角形、下から見ると長方形に近い形をしています。表面は磨かれてツルツルになっています。このツルツルとした手触りは研磨されたモノを観察するときの重要なヒントになります。

保美貝塚の石冠を知るために少し北上してみましょう。愛知県の北側にある岐阜県、その最も北の飛騨市は昔から石冠が多く発見さ

れることで有名な場所です。その飛騨市の石冠と比較してみます。飛騨市家ノ下遺跡から保美貝塚のものと似た石冠が出土しています。

家ノ下遺跡の資料を見てみましょう(図五)。白く曲線的な石で、言われてみれば保美貝塚の石冠と似ているような?というのが正直な感想でしょう。少し触ってみるとツルツルしていて、確かに似ているな、と思うことでしょう。もっとじっくり丁寧に触ってみましょう。右から左に…ツルツルしているだけです。上から下はどうか、と表面をなぞっていくと一定間隔で指が引っ掛かります。石冠を磨くときに微妙に向きを変えることで、横向きに面を作っていたのです。

図 5:岐阜県飛騨市 家ノ下遺跡出土 石冠（飛騨みやがわ考古民俗館所蔵）

こうなると保美貝塚の石冠も、実は表面に磨かれて作られた面があるのかと気になります。上から下に、右から左に—。触ってみても指が引っ掛かる感覚はなく、本当に曲面でした。保美貝塚では石冠の向きを細かく変えるのではなく、片面を一気に磨いていたのです。場所や時代、あるいはモノの種類によって手触り、ひいては作り方は異なるということになります。

石冠はある場所から離れるほど形が徐々に変わっていくということは知られていました。他のモノと同じです。しかし愛知県と岐阜県のような比較的近い場所でも作り方自体が違うということには気づかれていませんでした。じっくり触られることがあまりないからでしょう。

「触覚」は五感のひとつです。そしてモノを調べようとするなら(それが危険物でない限り)、しっかりと使わなければならない感覚でもあります。視覚とは別方向から情報を引き出してくれるからです。医師も診察のとき、触診をしますよね。

今回は愛知県保美貝塚の石冠と岐阜県家ノ下遺跡の石冠を観察して違いを見ていきましたが、触ってはじめてわかる違いを持つモノはまさか石冠だけではないでしょう。身近な道具についてもそうです。例えば、Amazonでは服の手触りや調理器具の持ちやすさはわかりませんよね。これからはもっと「触って見る」ようにしませんか?

手始めに南山大学人類学博物館を訪ねてみてはいかがでしょう。人類学博物館は展示されている資料を「触って見る」ことができる博物館です。実際に展示資料が触れる博物館はそう多くありませんし、資料数もかなりのものです。あなたの「触って見る」体験が充実しますように。

（南山大学大学院人間文化研究科
人類学専攻博士前期課程 岡 智康）

南山大学人類学博物館
「museum notes」VOL.4
二〇二一年六月発行
編集・発行／ 南山大学人類学博物館